
第二章 女のネットワークのなかで生きる

若林苗子（一九四七年ー　れ組スタジオ・東京　スタッフ）

ウーマンリブとの出会い

ウーマンリブに参加したきっかけは、一九七〇年十月二十二日の新聞記事です。前日の二十一日は国際反戦デーで、当時はいろいろなデモがあったのね。ベトナム反戦運動が活発だったし。その反戦デーに「銀座でウーマンリブの女たちが『お母さん、結婚って幸せ？』というスローガンを掲げてデモをした」という記事が、翌日の朝刊に出たの。私はそのスローガンにすごく共感した。それで、新聞社に電話をして、そのデモをやったグループの連絡先を聞いて、友達と訪ねていったんです。そこが「ぐるーぷ闘うおんな」の事務所だったんですよ。自分の連絡先を置いてきたら、葉書が来るわけですよ、「女の恨みをどうのこうの」とか「女の子殺しに連帯する女たちの会」とか、けっこうすごいのが。それで集会に行くようになったり、事務所に行ったり、みんなが共同生活しているところに行ったりするようになってね。

私は、一九七〇年三月に大学を卒業して、子どもに英語を教える塾で働いていたのね。仕事自体はそんなに嫌ではなかったけれど、当時、親たちの意向で英語を教えることや待遇（給料）で合わなくて、数ヶ月で辞めちゃったのよね。その後は、昼間は喫茶店でウェイトレスをして、夜

は御茶ノ水のアテネフランスに行つて、フランス語の勉強をして。まあ、好きなことをしていたわけですよ。一〇・二一のウーマンリブに出会つたのは、そんなときだった。

大学時代、学生運動には深入りしていなかった。デモに行くとしても、ベ平連なんかのデモで、セクトには行かなかった。私は体力がないから、ヘルメットをかぶつてゲバ棒をもって、というのは自分には合わないし最初から思つていたしね。でも、権威社会を何とかしないといけないとは思つていた。私は、私立の大学だったんだけど、教授会は定年後に東大から来た人たちが牛耳つていた。東大というのは、日本の学閥の頂点であつて、「東大卒」というのもつていればエリートとして生きていける。それなのに、全共闘の人たちは自ら中退して、それを拒否した。「すごいな」と思つた。

だから私も、大学の卒業試験のとき、本当に真剣に悩んだのよ。「学歴社会はおかしい」と思つているのに、試験を受けてしまうということは、その社会を受け入れることじゃないか、つて。でも、「貧乏な生活のなかで親も苦勞して大学に入れてくれたのに」と現実を見るとね。自分でも「やっぱり大卒の資格をもつていたほうが有利かな」と思つて、卒業しちゃったけど、卒業式も行かなかった。卒業したということが誇らしいと思えない、そういう時代だよな。

だから、リブもぜんぜん抵抗がなかった。リブの女たちの言つていること、たとえば家族制度や結婚制度を根本的に見直すとか、「結婚つて、家族つて、本当に幸せなの？」ということには、共感したんですよね。母を見ていて、そう思つたしね。

親元から出たいと思つていたから、女同士で共同生活をしている人たちを見て「いいなあ」と思つてね。実家を出るためにはお金を貯めなきゃならないけど、ウエイトレスじゃ貯まらない。

嫌いな仕事ではなかったけど、「ちゃんと働いてお金を稼ごう」と思って、翌年（一九七一年）の三月に転職しました。それは、新聞広告に募集が出ていたアルバイトで、銀行で株券を数える仕事。一カ月ぐらいやったら、「本店のほうで今、人を探しているから就職しないか」と誘われて、信託銀行に就職しちゃったんですよ。

正社員だからお金は貯められた。ボーナスをもらってすぐに辞めて、三鷹にアパートを借りて、家を出た。私が出ると言ったら、大学二年生だった妹が「お姉ちゃんが行くのなら私も行く」って、一緒に家出しちゃったんですよ。それが二十四歳のときです。銀行は辞めたけど、暮らしていかなきゃならないから、普通の会社に事務員として就職しましたけどね。

リブではその頃、優生保護法の改悪案の反対運動のために、集会をたくさんやってたよね。私もリブ新宿センター^二に出入りするようになって、そこで寝起きすることもあったけど、自分のアパートがあつたから、疲れると帰っては寝てました。それから、海外から来た資料を翻訳するグループに入りましたよ。リブセンターに行くのは、楽しかったし、刺激があつた。日本中からも、海外からも、いろいろな人が来るわけですよ。玄米食や東洋医学を知って、様々なカルチャーショーックを受けた。

メキシコ、アメリカへ

七五年にアメリカに行ったんだけど、それは田中美津さんが呼びかけたの。彼女は、連合赤軍の事件にすごく衝撃を受けて、体調が悪くなってしまつて。優生保護法の改悪案も七四年に阻止できたこともあつて、「もう日本から出たい」という気持ちがあつたみたい。「行くのなら、リブ

センターのスタッフ、みんなで行こうよ」ということで、最初は十人ぐらい「行こう、行こう」と言っていたのだけれど、いざ行くという段になったら少なくなっちゃってね。

私は英語が好きだったから、一度アメリカに行ってみたいという気持ちがあった。それに一人で行くのはたいへん。ビザをとるのもたいへんだったから、いいチャンスだと思って準備を始めました。

ビザはね、一年間の「文化交流ビザ」というのが取れたんですよ。Kさんという、リブセンターに出入りしていたアメリカ人のフェミニストが間に入ってくれて。スタンフォード大学の日本語科出身の、すごくエネルギーシユな人だった。彼女が、American Friends Service Committee (AFSC) というクエーカーの団体の職員だった人と友達で、その人にすごくプッシュしたのよ。「AFSCからビザを出してもらおうようにしてください」って。AFSCは、国連にもオフィスのある平和運動をしている団体で、東京にも事務所があったの。

それから、ビザをとるためには、アメリカの団体や個人から「私たちはこの人たちが来たらサポートします」というサポートレターをもらったほうがいい、ということ、スタンフォード大学とかミシガン大学とか日本語科のある大学に、私たちのレジュメを送った。イエローページを使って、女の運動のグループにも、めぼしいところにレジュメを送ったんだけど、Kさんが全部、英訳してくれたんですよ。

そうしたらね、ずいぶん返事が戻ってきたの、「日本のリブの人たちがアメリカに来て、こちらのリブと交流することは、すごく意義がある」「自分のところに泊まってもいいです」というサポートレターが。私はそういう手紙の束をもって、アメリカ大使館にビザをとりに行ったの。でも、

文化交流ビザって、有名人じゃないと取れないんですって。だから、アメリカに行ってよく言われましたよ、「よく取れましたね、こういうビザが」って。本当にありがたかったよね。

いよいよ行く、ということになったら、メキシコシティで国連の第一回国際女性年会議が開催されるということがわかって、メキシコにも行くことになりました。もちろん、アメリカに戻るつもりで行ったんですよ。ところが、田中美津さんと武田美由紀さんは、メキシコがすごく気に入っちゃって、「私たちはもうメキシコにいるから」って。「えーっ？ ビザをとるために、書類を揃えたり、サポーターを書いてもらったり、あんなに苦労したのに」と思ったけど、「まあいいや」と私は一人でアメリカに戻って、約一年間暮らしました。メキシコも一ヶ月弱ぐらい、いたかな。私もメキシコはすごく気に入りましたよ。とてもおもしろいところ。また行ってみたいです。

アメリカでの暮らし

アメリカに入ったときは、ロサンジェルス、フェミニニスト・ウイメンズ・ヘルス・センターの人が迎えに来てくれた。そこからメキシコへ行ったんだけど、ロスに戻って、サンフランシスコ、バークレーと手紙をくれた方や団体を訪問しました。

それで、私、バークレーをすごく気に入っちゃったのね。学生の街ですけれども、ヒッピーの運動が起きたところだし、綺麗で静かだし、自然食のレストランやマーケットもあるし。「住むんだったらここがいいな」と思って、バークレーの生協に部屋を探しに行きました。「ルームメイト求む」「アジア系の音楽が好きだ」「peaceful atmosphere」という掲示があって、興味をもって

行ったら、広い一軒家だった。二階はアフリカ系の女の人たちが三、四人で住んでいた。一階は、寝室が二つと大きなリビング、キッチン、バスルームがあった。お庭には、昔、馬小屋だったところがあって、そこにアジアの音楽が大好きな人が住んでいた。彼女はすごく自然派で、見たかんじは白人なんだけど、お母さんがインド系ということであジアにアイデンティティがあつて、レズビアンだった。私は母屋の一階のベッドルームを借りることになった。一階のもう一つの部屋は、ミルズ・カレッジというオークランドにある女子大に通っていた人が住んでいたんだけど、彼女もレズビアン。二人は恋人じゃないけどね。

ロスでお世話になった「フェミニスト・ウイメンズ・ヘルス・センター」というのは、全米で八ヶ所ぐらいあつたのね。ロスが最初なんだけど、バークレーの隣のオークランドにもあつた。オークランドは、アフリカ系の人が多く住んでいて、労働者が多い。バークレーはヒッピー、イッピーのミドルクラスというかんじなんだけど、センターは敢えてオークランドにクリニックをもっていたのね。私の住んでいたところからバスですぐだったので、そこに訪ねていったの。オークランドのクリニックで中心になっていた人は、ローラ・ブラウンさんという人で、最初にスペキュラムを広げる運動^三をロスでやったキャロル・ブラウンさんの娘さん。ローラさんはUCバークレーに行ったらしくて、オークランドでクリニック（「フェミニスト・ウイメンズ・ヘルス・センター・オークランド」）を開いたのね。女性のパートナーとね。私が会いに行ったら、「ちようど今、新人を探している」「トレイニーといって、訓練してスタツフになる人」「給料も払う」「あなた、やりませんか」と言われて、私は「これはいいや」と思って、そのスタツフになつたの。

女性を好きになる

職場の同僚もほとんどレズビアンだったんだけど、それは偶然ではないでしょうね。当時、本
当にレズビアン・フェミニズムの運動が活発なときだったと思う。みんな、レズビアン・フェミ
ニストというアイデンティティをもっていた。

私は、アメリカに行く前、レズビアン・フェミニズムのことはぜんぜん知らなかった。女性を
好きになったこともなかったし、当然、レズビアンだというアイデンティティはない。むしろ偏
見をもっていたと思うね。親元を出て、三鷹のアパートで一人暮らしをしていたとき、近くに三
本立ての安い映画館があったのね。入ったらポルノ映画をやっている、女同士のセックス・シー
ンが出てくる映画をたまたまやっていた。私は別にそれを観たくて入ったわけじゃなかったんだ
けど、三本立ての一本で観てしまって、その映画がすごく気分が悪かったの。

はつきり覚えていないんだけど、男っぽい人と女っぽい人との組み合わせで、女っぽい人が男
っぽい人に一生懸命尽くすわけよ。「いやあ、何で女同士でもこんなふうにやるのかしら」と思っ
て。要するに、男と女の役割分担が嫌だったわけです。まあ、後から考えたら、男がつくるポル
ノ映画で、男たちを性的に刺激して喜ばせるために作っているものだったんだけどね。たまたま
そういうのを観てしまって、レズビアンにマイナスのイメージをもっていました。

もちろん、リブ新宿センターに出入りしているレズビアンの人たちのことは知っていたし、海
外からも、レズビアンの資料がずいぶん来るわけです。それがいっぱい貯まってきちゃったか
ら、「ちゃんと翻訳したほうがいいね」ということになって、田中さんがリブニュース^四に「英文

資料がありますので、翻訳と一緒にやりませんか」「レズビアン・ラブとか子育てとか」「担当・若林」と、私の名前を出したわけよ。リブの仲間が集会で「私は女を愛する女です」と書いたチラシを一人で配ったりしていたのも知っていたの。ただ、自分とつながらなかったの。レズビアン・ラブの資料を何人かで翻訳したりしていたから、偏見はどんどんなくなっていくけど、自分自身が女を好きになったことがないわけで、自分とはつながらない、という状態でアメリカへ行ったわけですよ。

でも、ルームメイトもレズビアンだし、職場の同僚もレズビアンだし、それが日常になっちゃったのよね。クリニックだけでなく、出版社とか、オリビア・レコードというレコード会社とか、本屋さんとか、フェミニズム中心にやっている人たちは、やっぱりみんなレズビアンだったよね。レズビアンのカップルが多かった。

それで働いているうちに、すごく好きになった女の人がいたのよね。職場によく来るフィリピン系の友達の恋人だったの。私が好きになったのは、アフリカ系の人だった。相手は恋人がいるわけけれども、自分の気持ちを言いたくなって、それとなく言ったら、「あなたは私に何を望むのか」って言われました。「あ、これは駄目だ」と思って、あきらめましたけど。

それまで男の人を好きになったことはあったけど、女性に対してそういう気持ちをもったことがなかったから、自分の気持ちにはびっくりした。でも「ああ、おんなじだ」「こういうことなんだ」と思って、ぜんぜん不自然ではなかった。周りのカップルたちがレズビアン・フェミニズムの運動と日常の関係を共有していて、「あぁいいな」と思ったから、素直に女の人を好きになったんじゃないかしらね。

私が初めて好きになった人がアフリカ系の人だったんですけど、それは偶然ではなかったと思う。アメリカで生活していくなかで、人種差別をだんだん意識するようになって、「アジア人」というアイデンティティをすごく強くもった。パークレーやカリフォルニアは、第三世界の人たちの運動が活発だったし、第二次大戦中に強制収容所に容れられた日系人と友達になる経験ももてた。日本にいたら、そういう経験やアイデンティティをもつチャンスはなかったから、このことも自分にとってはずごく良かった。

『すばらしい女たち』の発行（一九七六）、女のパーティ（一九七六）

アメリカには一年いて、帰って来たらリーブセクターはまだあって、『すばらしい女たち』^五を作るグループが作業をしていたの。リーブセクターが閉鎖されたのは七七年だから、私が帰ってきた翌年なんですね。アンケートの集計結果を載せるだけではもったいないから、皆で原稿を書いて本にしようということで、『すばらしい女たち』ができた。私は、日本に住んでいた外国人の原稿（英語）を翻訳する作業をしました。帰ってきたら、そういうグループが活動を始めたところだったから、ラッキーだったと思うよね。

（女のパーティ^六について）アメリカでは、女の人が行ける安いディスコがサンフランシスコにいっぱいあったのね。倉庫みたいなところで音楽をかけて、みんなで踊ったりすることが簡単にできるわけ。「ああいうのっていいな」と思って、リーブセンのメンバーに「日本でもやろうよ」と言って、場所を探してやったことはあったね。スナックみたいなのを借りて、みんなに声をかけて「来たい人どうぞ」って。とくにセクシュアリティを問うてなかったと思うけど、声を

かけたのは、たぶんほとんどレズビアンだったわね。『すばらしい女たち』のメンバーとか、リブセンに來たレズビアンとか。だから、そのとき徐々に、ネットワークができてつあつたんだね。

女のからだ・ティーチン（一九七六―一九八二）、『私たちのリズム』（一九八二）

アメリカから帰ってきてすぐに、「女のからだ・ティーチン」を立ち上げました。「スペキュラムを広める運動」というのをリブニュースの購読者に呼びかけて、グループができたんですね。セクシュアリティは問いませんでした。最初はリブセンターで、リブセンターがなくなつてからは五十六番館でやっていました。五十六番館というのは、駒尺喜美さんと小西綾さんの神楽坂のお宅のことで、お家の一階に集會室を作つて、一人百円で貸してくれていたの。

まずスペキュラムの使い方をやつて、その後みんなでいろいろな話をするんだけど、私はそのときに必ず「自分はレズビアンです」と言つてから、自分の話をすることにしていた。私はそういうかたちで、セクシュアリティの話を出していったのね。ティーチンでは、「自分の性器は恥ずかしいものではない」「汚いと否定されてきたけれどもそうじゃない」「誰々のがきれい、誰々のが汚いということじゃない」「それは一人一人の個性だ」といった話をする。そういうことがわかると、女同士で連帯感をもてるんですね。そのなかで「レズビアンだ」と話すと、「あ、いろんなセクシュアリティがあるんだ」「そういう可能性もあるんだ」つて、すつと理解されるみたい。当時、リブの女たちのなかには、男と付き合っていた人でも、女の人と付き合うようになる人、けつこういたよね。続かか続かないかは別にして。それは、リブのなかで、私たちがずいぶん目に見える存在になつていったせいだと思う。だんだん壁がなくなつていつて、「それは不自然なこ

とでも何でもない」と思えるようになったんだと思うね。女の人と恋人同士になって、一緒に暮らしたりする人も、だんだん増えていったからね。

それから、ティーチインをやりながら本も作っていて、月経をテーマにした本を七人の女たちで出したんですね。それが二年かかったの。アンケートを日本全国のリブの女の人に配って、そのアンケートをもとにそれぞれがパートを担当して、月経痛から更年期までテーマごとに整理した。『私たちのリズム——月経・からだからのメッセージ』（一九八二）というタイトルで、現代書館から出ました。それはずいぶん取材も受けて、新聞や雑誌に記事が載ったり、講談社文庫に入ったりしたの。

本が完成したので、ティーチインのグループ活動はちよつとここでお休みしましょう、ということになりました。個人的には、お店を開いたということもあってね。それまで会社勤めをしていたんだけど、やっぱり会社の事務員は補助的な仕事も多いし、男中心のところ、いつも文句ばかり言ってたのよ。そうしたら、その当時のパートナーが「自然食品のお店やったら」「一階でお店ができるし、二階に住めるから」って一軒家の物件を見つけてきて、「えっ？ えっ？ えっ？」というかんじで始めてしまった。でもまあ、「自然食品だったら自分も食べているし、それを売るだけならできるだろう」と思って。それが八二年だったんですよ。ティーチインのグループ活動は休止したけど、その後も単発的に依頼があったときにはやっていました。

れ組のこまめ（一九八五）、レスビアン・ウィークエンド（一九八五）

早稲田で月一回スペースを借りて、「シスターフッドの会」というグループがレスビアンの集ま

りをやったのね。そこでね、『ウーマン・ラヴィング・ウィメン』という、アメリカのレズビアンたちが作ったスライドの上映をやったんですよ。八三年か、八四年だった。私たち、みんなで行ってね。すごく気に入っちゃって、「日本版の『ウーマン・ラヴィング・ウィメン』、スライドショーを作れたらいいね」という話で盛り上がったわけ。最初は五人だったのね。神楽さんと沢部さんと草間さんとカリドさんと私。でも、考えたら、「現実的に顔を出せる人はどれだけいるかね」という話になったのね。それで「ちよつと現実には難しいから、とりあえず通信を作ろう」って。それが「れ組のごまめ」発行の『れ組通信』⁷の始まりだったの。六月には埼玉で「国際フェミニスト会議」があると聞いたから「じゃあ、そこで売ろう」ということで、神楽さんが担当して第一号を作りました（一九八五年五月発行）。

国際フェミニスト会議というのは、日本のフェミニストのグループ、「国際女性年の会」とか「行動する私たちの会」とか「あごら」とか、いろんな女のグループと、I F J (International Feminist of Japan) という、日本に住んでいる欧米人のフェミニストのグループが一緒にやった会議だったんですよ。そのときに、アメリカ人のRさんというレズビアンから「レズビアンの分科会がぜんぜんないから、何かやりませんか」と誘われた。「じゃあ、やりましょう」ということで、私と神楽さんとRさんの三人でやることになったの。

そうしたら、人がいっぱい来たのよ、この分科会に。白人の欧米人が多かったんですけどね。でも、みんなすごく喜んじゃって。アメリカではレズビアンの運動もかなり目に見えるかたちになってたけど、日本ではまだまだだったでしょ。それで、「今度はレズビアンだけでやろうよ」という話になっていって、その年の十一月に「レズビアン会議」（後のレズビアン・ウィークエンド

人)を開いたわけ。

エイズ予防法案の反対運動（一九八八）

エイズ予防法案の反対運動に参加したのは、自分が小児まひにかかったこととつながっていると思うのね。一歳から三歳半ぐらいまでリハビリを受けていたときは、自分では憶えていないけど、でもその後も右手が弱いし、からだも弱いしね。小児まひというのはウイルスなんです。風邪やはしかと同じで、口から入って、抵抗力がある人は発病しない。エイズもウイルスだから、同じですよ。

こういう病気って、たまたま感染して、発病するかどうかじゃないですか。病気の一つではないのに、なぜエイズになったというだけで、社会からひどい目で見られて隔離されなきゃいけないのか、と。誰も自分で望んで病気になるわけじゃないし、病人というのは弱い立場でしょう？ そういう弱い立場にいる人に、何で石を投げるようなことをするのか、といったことに対しては、たぶん、感染症の大きな病気をしたことのない人よりは敏感だと思っすよ。

「ゲイが乱交してエイズが蔓延した」というイメージが、レズビアンの中にもありました。だから「そんなことになぜレズビアンが関わるんだ」と言う人もいた。でも、よく聞けば、日本の場合は薬害での感染者が多く、薬害エイズを隠すために、ゲイや性風俗の人をスケープゴートにしたわけですよ。

それとね、友達のレズビアンのカップルで、親にもカミングアウトして暮らしていた人がいたんだけど、親が「お前たち、大丈夫なのか」と聞いてきたっていうわけ。同性愛者だからね。そ

の話聞いて、「ゲイの問題だって言っちゃられないよ」と思ったの。それもあつたんですよ。同性愛に対するネガティブなイメージが強くなつたから、これは何とかしなくちゃいけないと。アカーのほうも動いていたし、れ組のなかにも何人が動いた人がいた。RINさんとか、なぎささんとか。「なんでそんなことに」という人も、何人かいたけどね。阻止連^九の人たちも動いてくれて、それで「エイズ予防法案を廃案にする女たちの会」というのを立ち上げたの。それはすごく良かった。連名だったけど、「れ組スタジオ・東京」の名前を出したからね。れ組が外に向けてアピールしたのは、それが初めてだったんですよ。

第二回 A L N (Asian Lesbian Network) 会議 (一九九二) 一〇で会場を借りるときには「アジア系レズビアン・ネットワーク」という名を出せなかった。残念だったけど、でもあれは無理だった。「レズビアン」って公に出したところには行けない、来られないという人がほとんどだったと思う。アジア系の人たちはビザの問題があるでしょ。アジアから来るときに「レズビアンの会議に来るために」なんて言ったら、ビザがとれない。そういうこともあつたから、会場にも「アジア系女性ネットワーク会議」って、「レズビアン」をとって申し込んだんですよ。でも、あの時点ではしよがなかつたと思うけどね。

だから、今回のれスタ二十周年^二は、本当に久しぶりに外に向けてやるイベントだよ。『ふえみん』やフェムネットのメイリングリストには、宣伝を出そうと思ってるの。みんな、仕事が忙しいし、疲れているし、あまり乗り気じゃなかつただけど、「規模が大きくなっていいから、忘年会をかねて、みんなで祝おうよ」って、やることになりました。

「思想派」と「根っから派」をめぐる議論（一九八〇年代後半）

私は「思想派」三のほうに入られているみたいなんだけど、自分ではあんまりそういうふうに考えたことはなくってね。「根っから派」というのは、ずっと一貫して同性が好きだった人ですよ。物心ついたときから、たとえば幼稚園の先生に憧れたとか、小学校の同級生に憧れたとか、男の子には一切興味がなくて、しかもそれを人に言えずにきたとか、そういう気持ちをもつてきた人。

それに対して、私みたいに、男の人も好きになったことがあるけど、大人になってから女性を好きになって、そしてそれをすごくいいと思つて、女性との関係でずっとやっていこうと思つた人もいる。ただ、それだけの違いだと思っわけですよ。

ただ、「何で女との関係がいいんですか」と聞かれたら、「対等だ」とか「よりいろんなものを分かち合える」「男女不平等の世の中で、男と対等な関係を作れるはずがないから」とか、いくらでも理由づけができますよね。それで「思想から入っていつレズビアンになった」というようなとらえ方をされたのかなと思っただけだね。

でも、人を好きになるって理屈じゃなくて感情でしょ。だから、男女平等とか女性解放とかの思想が根幹にあるかもしれないけど、「思想派レズビアン」っていうのは、ちよつとねえ。自分が変わっていったプロセスというのは、やっぱり「好き」という感情、性的関係をもつたときにすごく気持ち良くて「あ、いいな」って思つたという感情だからねえ。頭だけで「私、レズビアンです」というのは、ないと思っな。

当時ね、どうして「思想派 v s 根っから派」みたいなことになつちやつたかと言つたら、やっ

ぱりフェミニズムをどうとらえるかということと関係があったと思うの。私にとっては、フェミニズムとレズビアンであるということは、車の両輪みたいにつながっているわけですよ。ところが、いわゆる「根っから派」と言っている人たちのなかには、「自分は女だ」というアイデンティティをもっていないのでは、と考える人がいた。むしろ、男性のほうに近いように思えた。「自分は女ではない」「女のからだだけど女として見られるのは嫌だ」「女性的な受身の役割も嫌だ」「男性は感覚的に仲間」「女性性は異性」みたいなかんじで女性をみる。「タチとネコ」「ブッチとフェム」という役割について「それはそれでいいんじゃない」と考えていた人たちにしてみれば、フェミニズムの考え方によって自分を否定されたと思うわけね。「何でそんなに男っぽいよ」って、自分の男性（おとこせい）を否定される。実際、そういうやりとりはあったと思うよ。ブッチの人に対して「フェミニズムの視点が足りないんじゃない」とか。

極端になると、すごく女っぽい人に対してもね。リブやフェミニズムは「女性の自立」を主張するから、男性に媚びるようなかんじだと「それはおかしいんじゃない」って言っちゃったりして。若いときはとくにね。

「自分は男だ」と思っていたら、男社会のひどいところが見えない。そこが見えるかどうかだと思うんですよ。女性性は男女の関係で弱い立場にいるけれども「私たちは決して弱くないんだ」「私たちには可能性がある」って、男に見えないものがいっぱい見える。弱い立場にいる人はたいへんだけれども、でも可能性はあるし、弱い立場にいる女同士で連帯してやっていこうという気持ちもてるわけじゃない。そのへんの間感をもてるかもでないか、というのはすごく大きいと思うんだよね。シスターフッドってそういうことだと思うの。でも、そういう感覚って、「自分

は男だ」と思っちゃったなら、もてないよね。

セパレティズムをめぐって

セパレティズム^三は、敢えて分離するというよりは、今は何を優先するかということだと思っ
んですね。自分たち自身が十分に自己表現できていないとき、ネットワークができていないとき
に、まずいちばんに何にこだわるかって。カミングアウトができなくて、自分自身のことも認め
ることができないというときには、まず、共通のことをシェアできる人たちで集まりましょう、
ということであって、排外することとは違うんだよね。日本では、まだまだカミングアウトをす
るのは難しいわけだし、セパレティズムは、抱えている問題をオープンに語れるようになるまで
の、一つのプロセスだと思っんですよね。

レスタは、レズビアンオンリーというかたちにしていたわけではありません。購読したいと言
われれば、誰でもオーケー。男性の場合、「会員になりたい」と言われたらお断りしていたけど、
購読者として貢献してもらうのはいいですよ、と。まあ、男性はほとんどいなかったけどね。読
者には、結婚している人も、ヘテロもいます。

ここ数年は、よくMTFの人から電話がかかってくる。かなり行き場がなさそうなかんじです
よ。MTFのコミュニティに行ったらいいんじゃないかなと思うけど、「ないんです」って言うん
だよね。レズビアンというアイデンティティをもっている人は、さらに行き場がないみたいで。
最初は「どうしようか」って言ってただけど、今では、MTFレズビアンの読者もいるし、一
緒に発送作業をする人もいます。だから、そのときそのときで判断してやっていますよね。

今後

れスタの最初からのメンバーで、コンスタントに関わっているのは、今では私一人なんです。継続の秘訣って、私も考えるけど、何なんでしょうね。一つには、私だからだが丈夫じゃないから、無理ができないので、いつも「自分のできる範囲で」というかんじで関わってきているんですよ。それは大きいと思う。無理して、自分の力量以上のことはしない。それで続けてきたかなと思います。それと、れ組スタジオに対する興味と愛着は、ずっと続いてきた。『れ組通信』は、交代で責任編集しているわけだけでも、私自身、書くことが好きだし、こういう媒体があるということは、すごく嬉しいし、有難い。

それに、私は「嫌だな」と思ったことは一度もない。「何でだろうな」と思うけど、自分でもよくわからない。でもね、レズビアンって、みんな面白いんだよね。すごくユニーク。九十九人が「白だ」と言っているところで、一人だけ「黒です」と言えるということは、すごいことだと思うのね。だからそれだけ頑固だし、付和雷同しない。だからこそ、レズビアンとして生きてこられた。とくに、子どもの頃からの人ってそうだと思うのね。ヘテロ文化のなかで、一人だけ違うじゃない価値観をもち続けてきたって、すごいことだと思うのね。もちろん、人間関係で「ちよつといい加減にしてよ」と思うときもあるけど、やっぱり面白いんだよね。人間として興味が尽きないというか。だから、たぶん続けてきたんだと思う。

ただ、れ組スタジオの将来はわからない。読者数が減っているし、財政的な問題もある。赤字だから、もうわからないですよ。みんなが「続けたい」と思えば続くだろうけれども、「もうちょ

つと無理だね」ということになれば、そういうことになると思いますので。

私も、無理して続けたいとはぜんぜん思わない。楽しくなかったらやらない。私はやっぱり楽しいの。いろいろなことがあっても、自分のなかの楽しい許容範囲に入っているから。つらいことだけだったらやらないよ。だってボランティアだもん。でも、それがぜんぜん苦にならないということとは、やっぱり愛着があるし、「まだまだ必要だ」という気持ちもあるからだと思う。

私は、れ組だけじゃなくて、リブに出会ったときから女のネットワークのなかで生きてきて、自立とか、女のひととの関係の面白さとかを経験できた。海外に行ったのだって、自分の個人的な遊びで行ったのは、去年のソウルが初めてだもんね。リブセンターでアメリカに行ったときは、ビザを取るのも協力してもらって、お金もカンパしてもらって。二回目がジュネーブのレズビアン会議で、それも招待されて、カンパを集めて行ったでしょ。三回目がタイで、それもALNの会議だったのよ。すごく有難いよね。たまたまウーマンリブに入ったことがきっかけで、人間関係やネットワークが日本だけじゃなくて海外にも広がっていったって、今の自分を支えてくれている。そういう人生だったんだなって思います。

一 東京のリブ・グループの一つ。

二 ウーマンリブの運動拠点として一九七二年に開設（一九七七）。詳しくは第一章を参照。

三 スペキュラム（腔鏡）を用いて、子宮頸部を自分で検診する方法を普及させる運動。

四 リブ新宿センターが一九七二七六年に十八回発行した「この道ひとすじ」のこと。

五 一九七六年十一月に発行されたミニコミ誌。正式なタイトルは『レスビアンの女たちから全ての女たちにおける雑誌 すばらしい女たち』アンケート結果は『すばらしい女たち別冊（レスビアンに関するアンケート）集計とレポート』にまとめられている。詳しくは第一章を参照。

六 一九七六年頃から月一回ほどのペースで行われていた女性たちの集まり。詳しくは第一章を参照。

七 『れ組通信』には、「れ組のごまめ」発行のものと、「れ組スタジオ・東京」発行のものがある。「ごまめ」発行の創刊号は一九八五年五月十九日付で、最終号の二十二号は一九八七年三月八日付で発行されている。また、一九八七年三月一日に「れ組スタジオ・東京」が開設され、三月二十九日には「スタジオ」発行の『れ組通信』創刊号が発行された。二〇〇八年十月現在まで、月刊で発行され続けている。

八 レズビアンのための合宿形式のイベント。常設の運営組織があるわけではなく、参加者から次回のオルガナイザーが募られ、企画開催される。現在でも、全国各地で同様のイベントが行われている。その記念すべき第一回が「レスビアン会議」（主催 東京国際女性グループ）として、一九八五年十一月二、三、四日に埼玉・国立婦人教育会館で開かれた。

九 刑法・堕胎罪の撤廃を求めているグループ。一九八二年、優生保護法から「経済的理由」を削除しようとする動きに反対して生まれたグループであり、当初は「八二優生保護法改悪阻止連絡会」という名前。現在は「s o s h i r e n ・ 女（わたし）のからだから」。

一〇 アジア系レスビアンネットワーク。一九八六年、ジュネーブで開催された国際レスビアン会議（日本からは沢部、若林が参加）において、タイの人の呼びかけで作られた。ALNの会議は、第一回がタイ（一九九〇年十二月）、第二回が日本（一九九二年五月）、第三回が台湾（一九九五年八月）、第四回がフィリピン（一九九八年十二月）。第五回は二〇〇〇年に韓国で開催される予定だったが、未開催。

一一 二〇〇七年十二月二十三日にバフスペース（東京・早稲田）で行われたイベント。このインタビューは、イベントの一ヶ月前に行われた。

一二 一九八七年から八八年にかけて、『れ組通信』誌上で提起されていた問題である。「思想派」は「転向派」とも呼ばれていた。

一三 分離主義。レスビアン・コミュニティの文脈で言えば、レスビアンだけの共同体、空間、イベントなどの必要性を認める考え方。一九八〇年代前半から九〇年代前半の議論は、男性、ヘテロセクシュアル女性というよりは、

バイセクシュアル女性、既婚レズビアン¹⁶の参加を認めるかどうかが主な争点だった。

聞き手・まとめ・脚注 杉浦郁子

二〇〇七年十一月二十五日 れ組スタジオ・東京にて